

交際他者の多様性とその規定因

—ポジション・ジェネレータを用いて—

辻 竜 平

(信州大学人文学部)

【要旨】

交際他者の多様性のうち、ポジション・ジェネレータで測定できる職業階層的な意味での多様性に着目する。そして、その多様性が何によって規定されているのかを、マイクロ要因とマクロ要因との両側面から検討した。その結果、学歴、収入、職業、推定知人数、一般的信頼、一般的寛容性というマイクロ要因の効果や、都市規模というマクロ要因の効果があることが示された。また、性別間で、各要因の効果に違いがあることも示された。

キーワード：交際他者の多様性、ポジション・ジェネレータ、性差

1. 問題

人々が交際している他者（交際他者）には、さまざまな人々が含まれている。しかし、相対的に、交際他者がかなり類似している人や、逆にかかなり異質である人がいる。本稿では、交際他者の多様性が、何によって規定されているかについて検討する。以下では、問題をより詳細に述べていく。

1-1. 交際他者の多様性とポジション・ジェネレータ

1-1-1. ポジション・ジェネレータが測定するもの

交際他者の多様性といっても、それには、いくつかの側面がある。1つは、交際他者数の多さである。単純にどれだけ多くの人々と交際しているかであり、交際他者数が少ない人より多い人の方が、この点で多様であることになる。また1つは、どのような種類ないしカテゴリの人々と交際しているかである。少数の種類の人々と交際しているより、多数の種類の人々と交際している人の方が、この点で多様であることになる。さらに1つは、交際他者の地理的範囲の広がりである。地理的にごく身近な人々に交際が限られているより、地理的に遠くの人々との交際がある方が多様であることになる。

社会ネットワーク分析では、これらの種々の多様性を測定するための質問法（＝ジェネレータ）が存在する。交際他者数については、各種の知人数推定法、種類やカテゴリの多さについては、ポジション・ジェネレータ、地理的範囲の広がりについては、ジオグラフィカ

ル・ジェネレータによって測定できる。また、これらを別の間で並列して用いたり、同じ間の中でネスト——たとえば、ジオグラフィカル・ジェネレータで場所を特定した上で、ポジション・ジェネレータで、それらの人々の職業カテゴリを尋ねる——して用いたりすることも可能である。

本稿では、このうち、種類やカテゴリの多さを測定するポジション・ジェネレータを取り上げ、この意味での多様性が、どのような要因によって規定されているのかを検討する。

問 45 あなたの、家族・親戚・友人・知人の中で、次の職業の方はいますか。(〇はいくつでも)

1 弁護士	7 医師	13 警察官
2 建築士	8 看護師	14 市区町村の役所の課長
3 大企業の経営者	9 社会福祉士	15 保険の勧誘員
4 中小企業の経営者	10 ケアマネージャー	16 自動車修理工
5 大企業の課長	11 ホームヘルパー	17 道路・鉄道線路工夫
6 銀行員	12 農業従事者	18 どの職業の人もない

図1：ポジション・ジェネレータの一例

ポジション・ジェネレータは、図1のようなものであり、これが本稿で用いるものである。

ポジション・ジェネレータの「ポジション」とは、文字どおり、「位置」であり、社会的な位置を表すカテゴリであれば、それをを用いることができる。注意すべきことは、回答者本人がそのようなポジションにあるかどうかではなく、そのようなポジションにある人を知っているかどうかを問うのである。こうして、回答者がどのような社会的カテゴリの人々との関係があるかがわかる。たとえば、ある学校内での交際を調査するのであれば、「野球部の人」、「サッカー部の人」…に仲のよい人がいるかといった聞き方が可能である。

そうとはいうものの、ポジション・ジェネレータを用いた社会調査の場合、ポジションとして職業カテゴリを用いることが多い。それは、次項で詳述するが、各職業について「職業威信スコア」¹を割り当てることが可能だからである。特に、交際他者の社会階層の多様性について扱う場合には、職業カテゴリを用いるのが便利である。本稿でも、職業カテゴリを用いることとする。すなわち、ここで測定している交際他者の多様性は、交際他者の社会階層の観点から見た多様性ということになる。

1-1-2. ポジション・ジェネレータの特性

前項で述べたように、ポジション・ジェネレータに職業カテゴリを用いることによって、各職業の威信スコアを割り当てることができる。これによって、われわれは、ポジション・ジェネレータから、次のような指標を得ることができる。

¹ 1955年より10年おきに行われる「社会階層と社会移動全国調査」(通称、SSM調査)で20年おきに職業威信にかかわる調査が行われており、それは、0点から100点までの「職業威信スコア」として一覧にまとめられている。本稿では、1995年版の職業威信スコア、および、福祉関係職については、本学人文学部2009年度卒業論文で最優秀賞を受賞した古里由香里の研究(古里,2010)において測定された職業威信スコア(正確には、当該職に就いている人の自己評価に基づく職業威信スコア)を用いる。

- a. ポジション数：どのくらい多数の職業カテゴリの人々と交際があるか
- b. 威信スコアの最大値：どのくらい威信スコアの高い人と交際があるか
- c. 威信スコアの最小値：どのくらい威信スコアの低い人と交際があるか
- d. 威信スコアの範囲：上述のbの値からcの値を引いたもの

ナン・リン（2001=2008）は、中国の都市部で行われた調査において、ポジション・ジェネレータから得られた上のa, b, dの指標が主成分分析によって1主成分にまとまることを発見した。

これをもとに、辻は、日本において調査を行い、インターネット調査（辻（2008）、辻・小船（2008））や、東京都におけるランダム・サンプリング調査（辻，2012）においても、リンと同様の結果が頑健に現れることを確認した。そこで、その主成分得点を「ポジション・ジェネレータ得点」（以下、「PG得点」と表記）とする。

上のa, b, dの3つの指標が合成できることは、日本における人々の交際において、これらの3つの側面の間に高い相関があることを示しているが、cの威信スコアの最小値は同一主成分としてまとまらなかった。これは、威信スコアの低い人と知り合うことと、a, b, dとは相関が低いことを示しており、さらに、威信スコアの低い人との交際が、一様にランダムであることを示唆しているものと考えられる。なぜなら、威信スコアの低い人々とは、どのような人でも同程度に知り合うのだが、威信スコアの高い人と知り合うことによって、威信スコアの範囲の広さが生じていると考えると整合的に説明できるからである。

すなわち、PG得点で表される多様性とは、第一義的なaの意味での職業カテゴリの多様性だけではなく、交際他者の威信の高さや威信の範囲の広さという職業階層的な多様性という意味を併せ持った指標だということができる。

したがって、本稿で扱う問題は、職業階層の観点から見た交際他者の多様性が、どのような要因によって規定されているのかである。

1-2. 多様性の規定因

職業階層の観点から見た交際他者の多様性を規定する要因として、ここでは、次のような要因の効果を検討する。心理要因を含むミクロ要因としては、推定知人数、一般的信頼、一般的寛容性、性別、社会階層にかかわる諸要因、マクロ要因としては、都市規模（東京都の市区、その他の市、町、村の4つに分類）である。これらの要因について検討する根拠については以下で述べる。

1-2-1. 推定知人数

推定知人数とは、先に述べた交際他者数の多さにかかわっている。すなわち、単純に交際他者数が多ければ、交際他者の多様性も高いのではないかと予想している。しかし、調査票調査で正確に交際他者数を測定することは難しい。友人や知人を全て数え上げてもらうことは、実行不可能である。時間もかかるし、その場で思い出せない人もいるからである。当てずっぽうで何人と言われても、その信頼性は低いだろう。そこで、交際他者数を推定する必

要がある。そのために、電話帳法という推定法を用いる。このためには、次のような質問をする。

問 46 下にいくつかの苗字を示します。あなたの友人・知人の中で、次のような苗字の方は、何人いらっしゃるでしょうか。いらっしゃる場合、それぞれ数字に〇をし、人数をご記入ください。もし、これらのどの苗字の人もいない場合には、「11 ここにある苗字の友人・知人はいない」に〇をつけてください。

1	岩崎	→	<input type="text"/>	人	5	石田	→	<input type="text"/>	人	9	松田	→	<input type="text"/>	人
2	平野	→	<input type="text"/>	人	6	和田	→	<input type="text"/>	人	10	青木	→	<input type="text"/>	人
3	上野	→	<input type="text"/>	人	7	田村	→	<input type="text"/>	人	11	ここに ある苗字の 友人・知人は いない			
4	高田	→	<input type="text"/>	人	8	中野	→	<input type="text"/>	人					

図 2：知人数推定のための質問例

ここで、推定知人数は、次のようにして求められる。

$$\text{推定知人数} = 10\text{個の苗字の知人数の総和} \times \frac{\text{全国の電話帳に記載されている全件数}}{\text{全国の電話帳に記載されている10個の苗字の件数}} \quad (1)$$

全国の電話帳に記載されている件数²を数えるのは不可能ではない。毎年発行されている「写録宝夢巣」という電話帳ソフトウェアを使うと、簡単に数えることができる。上の式を、2004年度版「写録宝夢巣」³にしたがって実数表記すると、

$$\text{推定知人数} = 10\text{個の苗字の知人数の総和} \times \frac{28191237}{572340} = 10\text{個の苗字の知人数の総和} \times 49.26 \quad (2)$$

となる。つまり、1人想起されると、およそ50人の友人・知人がいることになる。

なお、10個の苗字は、2004年度版「写録宝夢巣」を用い、全国的に件数の多い(40~100位まで)苗字の中から、比較的偏りなく分布している苗字を選んだ。上位1~39位までを選ばなかったのは、そのような苗字を持つ友人・知人が複数人いる可能性が高く、実際に複数いる場合には、そのうち1人思い出すと、それ以上思い出す努力をしてももらえなくなり、推定値が低くなる可能性があるからである。

1-2-2. 一般的信頼と一般的寛容性

一般的信頼と一般的寛容性も、それぞれが高くなるにつれて、交際他者の多様性が高くなると予想される。

² 「軒数」と書くべきなのかもしれないが、電話帳には必ずしも1軒で電話番号1つといった対応関係にはないため、「件数」と表記することにする。

³ NTTの電話帳の登録件数は、年々減少してきている。そのため、近年のものではなく、私が持っているもっとも古いものとして2004年度版を用いている。

一般的信頼とは、他者一般に対する信頼と定義され、山岸（1998）は、それを、コミットメント関係から人々を解放するものとして位置づけている。そうであるならば、一般的信頼の高い人ほど、拘束的なコミットメント関係から解放され、多様な人々との交際を行う傾向を持っているものと考えられる。質問項目としては、山岸の一般的信頼尺度のうち、次の3項目を用いる。尺度は、「そう思う」～「そう思わない」の4件法とした。

- ・私は人を信頼する方である
- ・ほとんどの人は信頼できる
- ・ほとんどの人は基本的に善良で親切である

一般的寛容性とは、一般的信頼が他者一般に対する信頼と定義されるように、他者一般に対する寛容性を意味する。他者の持つ意見に対して寛容であるほど、多様な人々との交際を行う傾向を持っているものと考えられる。筆者はここ数年、寛容性の尺度構成に努めてきたが、3項目ながら、おおむね α 値が.7～.8程度の信頼性を持つものとなったので、次の3項目を一般的寛容性として利用することにした。

- ・自分と意見が違う人とつきあうのが苦にならない
- ・他者と意見が違うとき、その人が意見を変えなくてもつきあう
- ・自分と意見の違う人がいてもかまわない

ところで、安達（2008）は、ウォルツァー（1997=2003）に従いながら、信頼と寛容について、次のように整理している。信頼は、集団や社会の人々の同質性を基盤にしている。すなわち、集団や社会の内部にいる人々の間には同質性があり、それが信頼の源泉であるというわけである。一方、寛容は異質性を基盤にしている。異質な社会の間でうまくやっていくためには、寛容が必要であるという。

山岸は、一般的信頼を、特に誰とは限定されない他者一般に対する信頼と定義したが、安達の説に従えば、信頼が同質な集団や社会の中に限られるとするのは、矛盾している。そこで、山岸の『信頼の構造』（1998）を見てみると、安達が想定しているような民族間、宗教間の対立などがあるような社会を想定しているとは、一言も書かれていない。そうだとすると、山岸は、この社会には社会的ジレンマといった非協力の誘因はあるが、民族や宗教といった社会集団の間に見られるような、ときには血で血を洗うような深刻な対立はなく——対立はあったとしても、社会心理学で一時的に作られるような実験集団のように、実験後にデブリーフィングをすることによって容易に解消できる程度のものでしかない——、同質性が担保された範囲内の他者一般と考えられるのではないだろうか。そのように考えると、安達が述べているように、ある社会集団内での関係構築を促進するためには一般的信頼が必要で、社会集団間での関係構築を促進するためには一般的寛容性が必要だという説の方が説得的であるように思われる。

このような観点から改めて質問項目を見てみると、一般的信頼尺度には、特段に同質性や異質性を示唆する言葉は入っていない。そうであるから一般的なのだという見方もできるが、

この項目を見た回答者が、客観的な意味での他者一般ではなく、ある程度同質性をもった人々を想定して回答するということは、十分にありうることである。この推論には根拠がある。辻・針原（2002）は、一般的信頼尺度に出てくる「人」という言葉を「私の知り合い」（Acquaintance 条件、A条件）や「私のよく知らない人」（Stranger 条件、S条件）に変えて尋ねてみたところ、そのまま尋ねた場合（Control 条件、C条件）と比べてA条件>C条件>S条件の順に信頼していると回答した。これは、C条件の回答者が、「人」というものを、客観的な意味での他者一般ではなく、また、知り合いばかりでもなく、知らない人ばかりでもない、ある程度同質性をもった範囲の人々と想定するものだけということである。これは、一般的信頼尺度が、客観的な意味での他者一般に対する信頼というよりも、ある程度同質性をもった人々に対する信頼を測定していることを示すものである。

1-2-3. 性別

性別によって、どのようにして人づきあいを構築し、また、その関係を維持していくかにも違いがあると考えられる。それが交際他者の多様性に違いをもたらす可能性があるからである。

本稿では、単に性別を1変数として投入した分析を行うだけでなく、性別ごとに分析を行って、規定因の差異について検討を行う。

1-2-4. 社会階層にかかわる諸要因

社会階層にかかわる要因として、以下のようなものを考える。

第一に、学歴の効果について検討する。職業威信の高い職業は、弁護士・医師・大企業の経営者など、高学歴であることが要求されることが多く、高等教育の場が、将来そのような職業に就く人との人脈を形成する場としてはたらくことがあると考えられる。また、卒業後も、知的な水準の高さが合うことによって形成・維持される人間関係があると考えられる。

第二に、世帯収入の効果について検討する。可処分所得が多いほど、他者との交際に割ける費用が多くなるため、それが交際他者の多様性をもたらすと考えられる。

第三に、本人の職業について検討する。本人の職業については、図1のポジション・ジェネレータにあるよりもはるかに種類もあるが、サンプル数と分析の都合上6つの職業カテゴリ（農林漁業職、技能・労務・作業系の職業、販売・サービス系の職業、事務的職業、管理的職業、専門的職業）を設定し、その効果を検討する。

1-2-5. 都市規模

職業の多様性という観点から考えると、大都市圏には、多様な産業があり、それに従事する多様な職業の人々がいると考えられる。しかし、中小規模の都市、町、村となるにつれ、産業の多様性は減少し、それに従事する人々の職業の多様性も減少するものと考えられる。そこで、回答者の居住地の都市規模をマクロ要因として検討する。本稿で用いる調査は、関東甲信越50市区町村における調査であり、データには大都市圏から町村部までの人々が含まれているので、このような検討が可能である。

そこで、回答者の居住地を東京都の市区、その他の市、町、村の4つに分け、その交際他

者の多様性に対する効果を検討するものとする。

2. 調査概要

筆者が代表を務める科学研究費補助金基盤研究（B）「地域間格差と個人間格差の調査研究：ソーシャルキャピタル論的アプローチ」の一環として、2012年3月から4月にかけて、「地域の絆と健康に関する調査」を実施した。調査対象地は、関東甲信越50市区町村を、人口等によるウェイト付けを行わず、50市町村をランダムに選択した。計画サンプルサイズは、各市区町村につき60票で、 $50 \times 60 = 3000$ 票であった。調査対象者の年齢は、健康を調査の主題としたため、中高年齢層である40～79歳とした⁴。調査は郵送法による調査票調査で、有効回収数は1466票、宛先不明等の無効票21票を除いた有効回収率は49.2%であった。

3. 分析と結果

まず、データ全体を用いて、PG得点を従属変数とした重回帰分析を行った（表1）。モデル1では、まず、基本的なデモグラフィック要因である性別、年齢、学歴、本人の職業を投入した。職業についてはダミー変数とし、調査時点で「無職」を基準カテゴリとした。モデル2では、モデル1で投入した要因のほかに、ミクロ要因として、推定知人数、一般的信頼、一般的寛容性を投入した。さらにモデル3では、モデル2で投入した要因のほかに、マクロ要因として居住地の都市規模を投入した。都市規模はダミー変数とし、「村」を基準カテゴリとした。

⁴ 本稿においては、健康にかかわる分析は行わない。

表 1 PG 得点を従属変数とした重回帰分析

	モデル 1	モデル 2	モデル 3	単相関
性別 (0: 女性, 1: 男性)	-.038	-.028	-.025	-.025
年齢	.025	.000	-.004	-.095 **
学歴	.128 **	.120 **	.127 ***	.187 ***
世帯収入	.109 **	.081 *	.080 *	.164 ***
職業 (農林漁業)	-.016	-.019	-.022	-.044
職業 (技能・労務・作業)	.040	.042	.043	-.031
職業 (販売・サービス)	.070 †	.052	.053	.027
職業 (事務)	.004	.002	.000	-.006
職業 (管理)	.034	.006	.006	.057 †
職業 (専門)	.151 ***	.130 ***	.129 **	.179 ***
推定知人数		.210 ***	.215 ***	.236 ***
一般的信頼		.057	.057	.123 ***
一般的寛容性		.110 **	.106 **	.146 ***
町			-.036	.010
その他の市			-.088 *	-.040
東京市区			-.001	.026
F	6.305 ***	9.793 ***	8.284 ***	
R ²	.071	.134	.139	
Adj. R ²	.059	.120	.122	

職業の基準カテゴリは、無職。都市規模の基準カテゴリは、村。

モデルの要因にかかわる数値は、全て標準偏回帰係数 (β)。N = 840。

†: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$ 。

モデル 1～3 まで、いずれにおいても性別の影響は見られなかった。しかしながら、性別の影響は、それぞれのライフスタイルなどが異なり非常に複雑であるために、さまざまな影響が相殺されて効果が見えなくなっている可能性もある。そのため、のちに改めて性別ごとに分析を行うこととする。

学歴の効果は、モデル 1～3 まで一貫して高い。

また、世帯収入の効果は、モデル 1 に比べるとモデル 2 とモデル 3 でやや低くなるものの、有意である。

職業は、「専門」のみで一貫して効果が見られた。管理職は、単相関では 10% 水準で効果が見られたが、重回帰分析においては効果がなくなってしまった。そもそもそれほど強い相関ではなかったが、他のミクロ要因から生じた擬似相関であったものと考えられる。

推定知人数は、モデル 2 とモデル 3 で一貫して高く、他の要因よりも高い値を示している。交際他者が増えれば、それに伴って交際他者の多様性も増えるというのは、十分に予想される結果である。しかし、その効果は、いずれのモデルでも β の値が .2 を超えるくらいで、それほど際立って高いわけではない。

一般的信頼は、単相関では有意であったが、重回帰分析に投入すると、効果がなくなった。一方、一般的寛容性は、モデル 2 でもモデル 3 でも有意となっている。このことは、交際他

者の多様性を高める効果は、一般的信頼にはないが、一般的寛容性にあることを表している。安達の理論をふまえて言えば、社会集団内での関係構築を促進するよりも、社会集団間との関係構築を促進する方が、交際他者の多様性を高めることになる⁵。この結果は、社会集団内は相対的にはより同質性が高く、社会集団間はより異質性が高いという議論とも整合的である。

マクロ要因としての居住地の都市規模については、村と比べて町と東京市区はあまり違いがないが、その他の市は有意に多様性が低い。これについては、このあと性別ごとに分析したものを比較するさいに詳述するが、性別間で都市規模の効果が異なっており、男性がその他の市で大きな負の効果を持っているが、女性にはそのような効果がないところから、効果がいくらか弱まり、全体としては5%水準で負の効果となっている。

次に、性別ごとにPG得点を従属変数とした重回帰分析を行うこととする。それに先だって、性別間でPG得点が異なるかどうかt検定を行ったところ、M(男性) = -0.0086 、M(女性) = 0.0077 、 $T | 1192 | = 0.282$, n. s., となり、性差は見られなかった。

女性のみのデータで重回帰分析を行ったものが表2、男性のみのものが表3である。

⁵ もちろん、逆方向の因果もありうるが、一回限りのデータでは因果関係まではわからない。ここでは、このようなモデルにしたがって分析し、説明しようとしている。

表2 PG得点を従属変数とした重回帰分析(女性)

	モデル1	モデル2	モデル3	単相関
年齢	.018	.000	.004	-.106 *
学歴	.155 **	.148 **	.146 **	.248 ***
世帯収入	.103 *	.084 †	.076	.158 ***
職業(農林漁業)	-.077	-.069	-.073	-.096 *
職業(技能・労務・作業)	-.053	-.046	-.046	-.110 *
職業(販売・サービス)	.102 †	.098 †	.097 †	.053
職業(事務)	-.013	-.011	-.008	-.035
職業(管理)	.107 *	.108 *	.105 *	.108 *
職業(専門)	.208 ***	.209 ***	.209 ***	.264 ***
推定知人数		.165 ***	.174 ***	.188 ***
一般的信頼		-.012	-.010	.038
一般的寛容性		.089 †	.088 †	.098 *
町			-.078	-.076 †
その他の市			-.033	.033
東京市区			-.007	.064 †
F	7.178 ***	6.966 ***	5.679 ***	
R ²	.138	.173	.177	
Adj. R ²	.119	.148	.146	

職業の基準カテゴリは、無職。都市規模の基準カテゴリは、村。

モデルの要因にかかわる数値は、全て標準偏回帰係数(β)。N=412。

†: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$ 。

女性が、全体の傾向と異なる点を挙げてみよう。

学歴については、全体の分析よりも、やや効果が強く出ている。

職業については、管理的職業で、交際他者の多様性が高くなっている。また、販売・サービスの職業でも、交際他者の多様性が10%水準ではあるが高い傾向にある。さらに、全体での分析に比べて、女性では、専門的職業の β の値が高いが、次の表3に見るように、男性では、専門的職業は有意ではない。これは、女性がこれらの職業をとおして多様な人々と知り合う傾向があることを示している。

推定知人数・一般的信頼・一般的寛容性のミクロ要因については、3つとも全体の分析に比べて β の値が低くなっている。推定知人数については、なお大きな効果が認められ、一般的寛容性についても、10%水準で有意な傾向はあるものの、一般的信頼の効果は見られない。

また、居住地の都市規模というマクロ要因については、全体の分析で見られたその他の市の効果が見られない。どこに居住していても、女性の交際他者の多様性は変わらないということである。

結局のところ、女性の場合は、マクロ要因の効果はなく、ミクロ要因の効果も男性に比べて弱いことがわかる。一方、職業については、全体で分析するよりも効果が強くなっており、女性にとっては、どのような職業に就くかが交際他者の多様性を左右していると言える。

次に、男性の結果を見てみよう（表3）。

表3 P G得点を従属変数とした重回帰分析（男性）

	モデル1	モデル2	モデル3	単相関
年齢	.048	.014	.000	-.081 *
学歴	.114 *	.104 †	.125 *	.151 ***
世帯収入	.118 *	.074	.064	.168 ***
職業（農林漁業）	.025	.003	.005	-.006
職業（技能・労務・作業）	.090	.075	.070	.020
職業（販売・サービス）	.038	-.005	-.019	-.007
職業（事務）	.038	.029	.025	.028
職業（管理）	.040	-.024	-.021	.068 †
職業（専門）	.086	.030	.032	.085 *
推定知人数		.267 ***	.286 ***	.293 ***
一般的信頼		.114 *	.111 *	.198 ***
一般的寛容性		.134 **	.125 **	.187 ***
町			-.005	.094 *
その他の市			-.169 **	-.107 *
東京市区			-.047	-.027
F	2.213 *	6.408 ***	6.086 ***	
R ²	.045	.156	.181	
Adj. R ²	.025	.132	.152	

職業の基準カテゴリは、無職。都市規模の基準カテゴリは、村。

モデルの要因にかかわる数値は、全て標準偏回帰係数（ β ）。N = 428。

†: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$ 。

全体ないし女性の傾向と異なるのは、次の点である。

学歴については、全体の分析よりも、やや効果が弱くなっている。

世帯収入の効果は、全体の分析よりも弱くなり、モデル2とモデル3では、その効果は有意でなくなっている。

モデル1～モデル3のいずれにおいても、職業の効果は全くなくなっている。この点は、女性の場合と大いに異なっている。

推定知人数・一般的信頼・一般的寛容性のミクロ要因については、 β の値は3つとも全体より高く、とりわけ、推定知人数の効果が高くなっている。女性では有意ではなかった一般的信頼の β 値も有意となっている。

居住地の都市規模というマクロ要因については、その他の市の負の効果が大きい。女性ではこの値は有意ではなかったが、男性のみで有意となっている。その他の市とは、実質的には、中小の地方都市や大都市の郊外などに相当する。これらの場所においては、基準カテゴリである村よりも交際他者の多様性が低い。

このように、マクロ要因の効果は、性別間で異なっている。まず、女性の場合、すでに見たように、どのような職業に就くかが交際他者の多様性に影響を与えているが、都市規模の効果はなかった。また、上記の表2の分析に職業×都市規模の交互作用項をさらに加えて分析を行ったところ、都市部の技能・労務・作業系の職業の場合に多様性が高くなる傾向がある($\beta = .141$, $p < .10$)のみであった。一方、男性の場合、推定知人数・一般的信頼・一般的寛容性といったミクロ要因が交際他者の多様性に影響を与えているが、このことについては都市規模による差が見られる。また、上記の表3の分析に職業×都市規模の交互作用項をさらに加えて分析を行ったところ、交互作用の効果はなかった。ここから、ミクロ要因の効果は、都市規模にかかわらず見られるが、その他の市においては、町村や大都市に比べてPG得点が全般に低くなるというわけである。したがって、考えるべきは、その他の市において、なぜミクロ要因の効果が高くなるかである。

重回帰分析の標準偏回帰係数の値においては、3つのミクロ要因(推定知人数、一般的信頼、一般的寛容性)のうち推定知人数の効果が高くなっている。また、3つのミクロ要因について、都市規模ごとに違いがあるかを1要因分散分析で確認したところ、やはり、推定知人数のみで10%水準で有意な傾向差が見られた(推定知人数: $F(3, 506) = 2.318$, $p < .10$, 一般的信頼: $F(3, 506) = 0.270$, n.s., 一般的寛容性: $F(3, 506) = 0.483$, n.s.)。推定知人数について事後検定を行ったところ、都市規模カテゴリ間に有意差が見られることはなかったが、町とその他の市が、村と大都市より低い値を示した。

このことから、その他の市(地方都市や大都市郊外)において男性のPG得点が低いのは、主として知人数が少ないことから生じていると考えられる。この分析では、地方都市と大都市郊外とを基準を設けて区別しなかったため、その間にあるかもしれない違いについて述べることはできない。両方において知人数が少ないのか、片方においてのみ少ないのかはわからない。そこで、以下は推測である。もし地方都市において男性の知人数が少ないとしたら、次のような理由が考えられる。すなわち、仕事などで知り合う他者がその市内あるいは近隣市町村に限られる傾向があるが、それでも、ある程度は多様性があるに不便を感じるわけではないので、あまり遠くまで交際の範囲を拡大しないのだろう。そのため、交際他者数が増加しないのかもしれない。この意味では、村の方がその村内や近隣市町村における他者の多様性は少ないが、それに不便を感じて外に向かって交際他者を求めるため、結果として村の方が交際他者数や交際他者の多様性が増加すると考えられる。一方、もし大都市郊外において男性の知人数が少ないとしたら、通勤時間を割くことによって他者との交際に当てる時間が少なくなり、交際他者数が他と比較して少なくなるからと考えられる。そして交際他者数の少なさが多様性の低さにつながっているのだろう。このように、地方都市と大都市郊外とで、どちらか、あるいは、どちらものメカニズムがはたらくことによって、知人数が少なくなり、それが多様性を低めていると考えられる。

4. 全体的な考察

本稿では、ポジション・ジェネレータを用い、それが表す多様性の内容について検討してきた。職業カテゴリを用いたポジション・ジェネレータによって得られる多様性とは、職業

カテゴリの多様性だけではなく、交際他者の威信の高さや威信の範囲の広さという職業階層的な多様性という意味を併せ持った指標である。

そして、このような意味での多様性が、どのような要因によって規定されているのかを分析した。その結果、性別間で多様性を規定する要因が異なることがわかった。また、男女を併せて分析すると、おおむねその中間的な結果となっていることが見てとれる。

女性の場合、自身の職業が何であるかによって、交際他者の多様性が異なることが示された。専門、管理、販売・サービスといった職業が多様性を高めることがわかった。男性の場合、ミクロ要因である交際知人数、一般的信頼、一般的寛容性が多い／高いほど、交際他者の多様性が高いことが示された。また、男性の場合は、居住地が地方都市や大都市の郊外の場合に、交際他者の多様性が低いことが示された。

このことは、女性の場合、職業人としてのライフスタイルそのものが、交際他者の多様性を規定しているのに対し、男性の場合は、他者との交際にかかわる心理的な態度が、交際他者の多様性を規定していることが特徴であるとまとめられる。本稿では、性別間の差を記述することが目的の1つであったが、このような性別間の差異が生じた理由については、今後の研究課題としたい。

【文献】

- 安達智史, 2008, 「信頼と寛容の社会理論：多文化主義の限界とリベラル・ナショナリズム論」社会学研究, 84: 15-44.
- 古里由香里, 2010, 「介護職の専門職化と職場環境に関わる問題の構造」信州大学人文学部卒業論文.
- Lin, Nan, 2001, *Social capital: A theory of social structure and action*, Cambridge University Press. (=2008, 筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳, 『ソーシャル・キャピタル：社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房.)
- 辻竜平, 2008, 「直接的・間接的にアクセス可能な他者と地位達成：ポジション・ジェネレータを用いて」日本社会学会第81回大会.
- 辻竜平, 2012, 「信頼と寛容：概念整理と規定因」数理社会学会第53回大会.
- 辻竜平・針原素子, 2002, 「都市と村落の社会的ネットワークと一般的信頼」日本社会心理学会第43回大会.
- 辻竜平・小船達己, 2008, 「直接的・間接的にアクセス可能なネットワークが一般的信頼と寛容性に及ぼす効果：ポジション・ジェネレータを用いて」日本社会心理学会第49回大会.
- Walzer, Michael, 1997, *On toleration*, Yale University Press. (=2003, 大川正彦訳, 『寛容について』みすず書房.)
- 山岸俊男, 1998, 『信頼の構造：こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会.

Diversity of Acquainted Others and Its Determinants Some Analyses Using A Position Generator

Ryuhei Tsuji

(Faculty of Arts, Shinshu University)

【Abstract】

Amongst various kinds of diversities of acquainted others, I dealt with a diversity in terms of occupational stratification measured by a position generator. I analyzed the effects of micro- and macro-level determinants on the diversity. Results showed that there were effects of micro-level determinants such as education, income, occupation, estimated number of acquaintances, general trust, and general tolerance, and macro-level determinants such as the size of the cities on the diversity. Results also showed that the strengths of those effects were different between genders.

Keywords: diversity of acquainted others, position generator, difference between genders

(2012年10月31日受理, 12月4日掲載承認)